広島大学教育学部紀要　第2部　第39号　1991. 2 .26

「カラ」で言いさす文

白川博之
(1990年9月11日受理)

Unfinished Sentences with *Kara*

Hiroyuki Shirakawa

In the spoken Japanese language, we often employ unfinished sentences which end with subordinate conjunctions such as *kara*, *noni* and *ke(re)do*. These sentenses are felt to be complete sentences in spite of their structural incompleteness and the conjunctions employed function like sentence-final particles.

This paper deals with sentences ending with *kara*. *Kara* is generally said to be a conjunction which indicates reason. But strangely enough, its sentence final use adds to the sentence emphatic implication to express the speaker's strong will or volition, which is not predictable from its original meaning.

It will be argued why such sentence-final usage is possible with *Kara*. It will be shown that the conjunction *kara* indicates not only "reason" but also "background" and that the sentence-final usage is a natural result of the omission of the main clause in the "background" usage.

1．はじめに

話し言葉を観察していると，書き言葉との違いがいろいろと目につくが，統語論的に注目すべき現象に範囲を絞って言うならば，必ず言及しなければならないこととして，述語の終止形（＋終助詞）以外の形式による文末表現が多く用いられることが挙げられる。具体的には，対談集やシナリオ，マンガなどによって文末表現を追ってみると，いわゆる「接続助詞」（カラ，ノデ，ノニ，ケレド，ガ，テ，など）による文の終止（中止）が頻出することがわかる。

このような「言いさし」の用法のうち，前稿では，テ形の用法を取り上げ，現象だけ捉えれば終助詞的に見えるこれらの用法が，実は，全面的に文脈依存的であって，それゆえ，終助詞とは一線を画すべきものである旨，論じた。結論的には，「終助詞的」な「テ形」の用法は，「接続助詞」としての本来的な用法の延長線上に位置づけられることになる。【1】

それに引き続いて，この論文では，「カラ」による言いさしの文について吟味してみる。

考察の対象にするのは，次のような「カラ」の用法である。

(1)じゃ，ぼくは帰るから。（余裕）

(2)絶対に許しませんからね。（ときめき，117）

このような「カラ」は，接続助詞らしさに欠けていて，むしろ終助詞に似た性質を帯びている。その性質は，単に従属節のみで言いさしていて主文が後続していないという統語的な特徴だけでなく，主文を補おうにも補うべき主文が考えにくい，という意味的な特徴によって，支えられている。

問題は，この終助詞的な用法と，本来的な用法とのギャップである。『新明解国語辞典』によると，「カラ」は終助詞的に用いられて，「相手に向かって強い決意を表わす」というが，なぜ，一般に原因・理由を表わすとされる接続助詞が，「相手に向かって強い決意を表わす」ときにも使えるのだろうか。この二つの用法は，少なくとも，現象的には，かけはなれた用法として目に映じる。

この論文の目的は，「カラ」の本来的な用法と，終助詞的な用法との連続性を探って，両者のギャップを埋めることにある。

なお，「カラ」で言いさしになった文であっても，次

のような「カラ」は，考察の対象から外れる。

(3)〔帰ろうとして〕

そ，それじゃ，あたし，邪魔しちゃ悪いから。

(めぞん⑦，210)

(4)〔五代が響子のことをじっと見ている〕

響子「あの…なにか？」

五代「いえ……なんか手持ちぶさたみたいだから……」

響子「あら，そんな」

(めぞん⑦，149)

(5)桃子「千明に会った？」

良介「まだや」

桃子「どうして？」

良介「どうしてって，向こうも忙しいっていうてたから」

(夏物語，208)

(3)，(4)，(5)の「カラ」の後には，それぞれ，「コレデ失礼シマス」，「ジット見テイタノデス」，「会ッテイナインダ」というような主文を補うことが可能である。このような文においては，説明を要するようなことの存在が発話時に既に話し手・聞き手にとって明らかであって，それについての説明部分を，「カラ」の節が行っている，そして，何についての説明か，ということは文脈から自明だから省略されている，と考える。つまり，これらは，本来的な接続助詞の用法に還元して説明を付けることが容易にできる。

また，次のような文は，主節と従属節とが倒置された文だから，まっとうな接続助詞としての用法の変種と考え，考察の対象にはしない。

(6)ちょっと待って，お茶いれるから。

(ラブ②，30)

(7)あの「M」をつかえ，俺のツケがきくから。

(ラブ①，225)

2．終助詞的な「カラ」の表現効果

終助詞的な「カラ」は，話し言葉では　繁に見受けられるのに，その本格的な意味記述については，わたくしの知る限り，見当たらない。この論文の本来の目的は分類学的な用法登録ではないが，対象となる用法の特徴を詳しく調べることが，原理的な説明の下ごしらえになると思うので，さまざまな用法について一つ一つ見ていくことにする。

なお，網羅的な分類を意図したものではないので，以下のいずれにも該当しない用例が当然あるだろうし，まだ，複数の事項に該当する用例があるかもしれないが，それは，議論の本筋には，差し支えない。

2.1.意志を告知する

さきほどの『新明解国語辞典』の他に，『三省堂国語辞典（第三版）』の次の記述にも窺えるとおり，

(8)〔そこで中止して〕決意・断定などをあらわす。

ぞ。よ。「ただではおかない一」

「決意」を表わすときに用いられることが多いようだ。しかし，「決意」という用語は，たしかに，(8)のようなものものしい文脈にはぴったりだが，そのような大袈裟な状況でなくとも使えるので，「意志の告知」とでも言った方がふさわしいかもしれない。

たとえば，次のような文が，その典型例である。

(9)五代「ぼく先にもどってますから。三鷹さんあとはよろしく……」

三鷹「ごっ，五代くん！！」

(めぞん②，59)

(10)完治「じゃあね！　ぼく，金払って先に帰るから。大丈夫だね，ひと眠りしたら一人で帰れるねっ」

(ラブ①，13)

もちろん，「決意」と言うにふさわしい，抜き差しならぬ緊張した場面に使っても，よい。

(11)完治「ええっ!?　これから迎えに来いって!?」

リカ「だって，荷物重たいんだもーん。外まわりって言って，うまく抜けてきちゃいなさいよ」

完治「そういうわけには……」

リカ「迎えに来てくれるまでは，二日でも三日でも空港ロビーで野宿して待ってるから」

(ラブ②，132)

なお，「決意」を「意志」に言い改めるだけでなく，「告知」という言葉を添えたのは，単に意志を表わすだけでなく，その意志を聞き手に徹底する気持ちが込められていると思われるからである。だから，一人ごとのように，「告知」する相手がいない場合は，「カラ」を使うことはできない。

(12)〔一人暮らしのアパートで〕

a．さあ，食うぞ！

b．＊さあ，食うから！

2.2.　新情報を告知する

告知する内容は，話し手自身の意志に限られるわけではない。話し手の心理的な状態であってもよい。

(13)美和子「ねえ，席，どうする？」

千明「どうするって？」

美和子「男と女がバラバラじゃつまらないし……男女二人ずつ座ると，一人余るじゃない……」

千明「そういうことね」

美和子「私，あぶれるのいやだからね」

（夏物語，179）

⒁五代「もういいですよ……おこってませんから」

響子「本当に……？」

五代「本当ですとも」

（めぞん②，141）

もっと言えば，話し手自身のことに限らず，一般に，聞き手が知らないことを告知するときに用いられる。

⒂看護婦「あ，五代さん」

五代「はい」

看護婦「あなたのお隣のベッドに，患者さんがはいりますから……」

五代「ああ，今運びこまれた人……」

（めぞん⑦，161）

⒃桃子「この間はありがとう」

良介「何……？」

桃子「お肉」

良介「ああ」

桃子「千明も呼んで食べたから……」

良介「そう……」

（夏物語，207）

⒂，⒃からわかるとおり，告知される内容は，これから起こることでも，既に起こっていることでもよい。ともかく，聞き手が知らないことを教えてやるときに用いられる。

この点で，「カラ」の用法は，終助詞の「ヨ」の用法に酷似している。実際，「新情報の告知」の用法の「カラ」は，多くの場合，「ヨ」と置き換えることが出来，「カラ」が確かに「終助詞的」であることを物語っている（「意志の告知」の用法についても同様。）

ただし，聞き手が知らないことを教えると言っても次のような場合には，「カラ」は使わない。

⒄〔雨が降り出したことを隣家の人に知らせる〕

a．寺田さん，雨ですよ。

b．＊寺田さん，雨ですから。

⒅a．きのう，変なところで片山先生にあったよ。

b．＊きのう，変なところで片山先生にあったから。【2】

言わないばかりでなく，もし，このような発話を聞いたとしたら，「だから，どうしたというのだ？」という具合に，その結末を聞きたくなるような，文字通りの言いさしの文になる。したがって，「新事実の告知」という特徴づけでは，まだ，本質をついていないことがわかる。

2.3.反応をうながす

以上の用法が，比較的，一方的に話し手から聞き手に情報の伝達が行われていたのに対し，聞き手の側の何らかの反応をうながそうとして発話される「カラ」も，劣らぬ頻度をもって使われる。

たとえば，次のような文がそうである。

⒆〔料理を作りながら〕

響子「五代さん，もうすぐできますから」

五代「はい」

（めぞん②，77）

⒆は，料理がなかなか出来ないのを空腹を堪えて待っているかもしれない相手に向かって，なだめる意図で発話されたものだろう。「焦らずに待つ」という反応を期待して発話されたものである。

次の例は，「なだめ」の言語行動がさらにはっきりした例である。

⒇〔娘の妊娠を疑っている母親に向かって〕

えみ「赤ちゃん出来るような事してないから」

佳代「当り前でしょ」

（十六歳，27）

㉑五代「本当だろーなー，坂本，いいバイトがあるって……」

坂本「本当だってば，もうすぐ小林が迎えにくるから」

（めぞん⑦，26）

また，依頼の表現に補足的に用いられて，相手の行動をうながすために発話されるものもある。

㉒えみ「キスしてもいいよ」

沖中「？！」

えみ「誰にも言わないから」

えみ，目を閉じ，顔を上げる。

沖中，ためらう。

えみ「早く」

（十六歳，33）

㉓完治「三上が戻ってきたら，笑顔で迎えてやって」

さとみ「え!?」

完治「それですべてうまくゆくから……うまくいくから……きっと」

㉒，㉓において，「カラ」の文は，それを発話することによって，聞き手が行動に移す気になるように仕向けることを意図して発話されている。

行動をうながす発話は，譲歩的な条件を提示することによって，次のように，「せがみ」の様相を呈することにもなる。

㉔響子「大学祭に行ってもいいですか？」

五代「えっ……!?　あの……大学祭ってぼくの大学の……？」

響子「はい。邪魔にならないように，適当にやりますから……」

五代「邪魔なんてとんでもない!!　ぼくご案内します!!」

(めぞん②, 145)

言うまでもなく，㉔の「カラ」節は，話し手が聞き手に求めている承諾という行為をうながす意図で発話されている。

いずれにしても，話し手が持ちかける情報は，単に新情報で聞き手にとってそれを知ること自体に意義があるというだけではなく，話し手にとって，自分が聞き手に対して望む行動（あるいは心の持ち様の変化）を首尾よく起こさせようという意図をもって告知されている。

つまり，話し手の目論見は，情報の告知そのものではなく，それによって結果的に引き起こされる聞き手の反応の方にある，ということになる。

ところで，このことに関連して，もう一度，国語辞典の記述を引き合いに出すと，『現代国語辞典』（三省堂）が，次のような説明をしていることは，注目に値する。

㉕〔終助詞的に用いて〕相手に言いわたして，反応を求めるのに用いる。「ただではおかない―」

すなわち，「相手に言いわたす」ということだけでなく，踏み込んで，その発話行為の意図を「反応を求める」ことと見定めているところは，小辞典ながら，的を射た記述である。

ただし，①「相手に言いわたす」ことと「反応を求めること」とを直結して考えていること，また，それと大いに関係するが，②「反応を求める」ということの例示としては，挙げられた例文が適切でないこと，の２点で，必ずしも，満足のいく記述とは言えない。

３．終助詞的な「カラ」の言外の意味

わたくしは，終助詞的な「カラ」の機能を「相手の反応を求める」ことだと説明するのは，言いすぎだと考える。実際の用例に当たって検討してみると，「相手に言いわたす」ことはしていても，積極的に「反応を求める」ことは意図していないような「カラ」の用法がほとんどだからである。

前の節で，「意志の告知」，「新事実の告知」を表わすとした用例がすべてこれに当たることは，明らかである。最後の「反応をうながす」用法も，結果的に相手に期待どおりの行動をとるように仕向けるだけであるから，正確に言えば，「反応を求める」というような積極的な意味合いは，ない。

論点を浮き彫りにするための用例を追加しておこう。

㉖〔エミとおばのジュンコが台所をせわしなく動き回っている。一方で，スコットはコーヒーを飲み新聞を読みながらくつろいでいる〕

ジュンコ：はい魔法びんよ，スコット。熱いココアを入れておいたからね。

スコット：どうもありがとう，かあさん。

(『英語会話』1990.2)

㉖において，話し手は，聞き手に新情報を告知してはいるが，何か，反応を求めているわけではない（たとえば，「飲みなさい」，「気をつけなさい」，「持っていきなさい」等々。）話し手としては，「魔法瓶の中に熱いコーヒーが入っている」という情報を聞き手が承知していてくれされすれば，それで，発話の目的は達成されたことになり，聞き手がそれからどういう行動をとるかについては，完全に聞き手自身の自由に委ねられている。

それでは，㉖のような言いさし表現の場合には，「相手に（新情報を）言いわたす」ということ以上のことが行われていないのかというと，そうではない。その証拠に，㉖のような文脈で，「カラ」を使わないでただの確言形で文を終止したとしたら，少々，すわりが悪い文になる。

(26')はい魔法瓶よ，スコット。？熱いコーヒーを入れておいた（おきました）。【３】

(26')の確言形による文末表現でも，相手に新情報を「言いわたし」たことになるはずだが，これだけでは，直前の文の繋がりがスムーズでなくなるようである。したがって，「カラ」を加えることによって，「言いわたし」＋αの意味合いが添えられ，その「＋α」の表現効果によって，直前の文との繋がりが保証されていると考えざるを得ない。

その「＋α」の正体は，「反応を求める」ことでないとしたら，何なのだろうか。もう少し類例を吟味することによって，考えていこう。

㉗〔「はとバス」の集合場所で〕

千明「座席は抽選だからね」

桃子「好きなとこに座っていいんじゃないの」

千明「ダメ」

桃子「どうしてよ（君章を見上げる）」

千明「どこに座るかは，そのたびに決めることにしたの！　はい，引いて」

と，切符を出す。

(夏物語, 180)

㉗の当該文は，放っておくと好き勝手な座席に座ってしまうと懸念される友人たちに向かって，それを牽制する意図をもって発話されている。その意味合いは，まさに「牽制」というにふさわしく，積極的に，「～す

るな」あるいは「～しろ」という指図の意味を言外に含んでいるわけではない。しいて，(27)の言いさし表現の，言わずにおかれた言外の意味を言語化するとしたら，次のようなものだろう。

(28)ソノ積モリデイテクダサイ。

国語辞典の文例によく使われているのは，(28)のような言外の意味を持つ場合である。もう一度，『現代国語辞典』の文例を引用すると，

(29)ただではおかないから。

(29)の文は，積極的に何らかの反応を求めているというよりも，正確には，新情報を与えて，それを踏まえて相手に自分のとるべき行動を考えさせる，という効果を持っている。

次のような用例も，同様にして説明できる。

(30)〔婦人総合センターの閲覧コーナーで。女（50歳）の係員がえみの手から本を取り上げ，表紙を見る〕

係員「もう少し高校生らしい本をお読みなさい。それから，立て膝は，お行儀悪いですよ」

えみ，係員の言葉の終わらぬうちに立ち上がり，ムッとして行きかける。

係員「もう一つ。ペットの持ち込みは，禁止ですからね」

えみ「ペットじゃありません。夕食のおかずです」

係員「げっ！」

九官鳥「ゼツボウダッ！」

（十六歳，19）

(31)さとみ「あ，雨が降ってきた。……そこまでだから……入れてってくれないかな？　傘置いてきちゃったのよ」

さとみと完治，目を合わせてしばし沈黙。完治，傘を差し出す。

完治「あげるよ。安物だからすてちゃっていい……返さなくていいから」

（ラブ①，135）

もちろん，終助詞的な「カラ」の言いさし文における「＋α」の内容がいつも(28)のようなものだ，と言っているのではなくて，文脈に応じて，言外の意味の解釈の仕方に，多少の変異はある。たとえば，次のような文脈でも，話し手が積極的に相手に反応を求めていないことが明らかである。

(32)〔海水浴場でたまたま知り合った者どうしで〕

三鷹「じゃ，きみたち，連れがもどったんで失敬するよ」

女子学生「つまんなーい」

近くのホテルの建物を指して，

女子学生「私たち，あのホテルに泊まってますから」

三鷹「あはは」

五代「（あきれ顔で）近頃の若い娘は……」

（めぞん②，54）

女子学生は，何か期待することがあって自分たちの宿泊先を三鷹に教えたのだろう（たとえば，そう言っておけば，もしかしたら，三鷹が夜にまた誘いに来てくれるかもしれない。）もって回った言い方になるが，女子学生は，自分たちが期待する行動を三鷹が実行に移すために必要となる情報を与えたことになる。この場合は，言外の意味をあえて言語化して表すとしたら，次のようになるだろう。

(33)何カアッタラ，ヨロシク（ドウゾ）

また，次のように，これからどこか他所へ行く際に相手に言い置いて去る場合にも，よく使われる。

(34)真澄「先に部室行ってるからね」

（十六歳，21）

なぜ，このような状況で言いさしの「カラ」を使うのか。黙って不在にすると，相手がどこへ行ったのかと心配するからだろう。また，不在中に，何か用事が出来て対処に困るかもしれない。そこで，相手に，不在の事実や在所を承知しておいてもらうのである。このような場合の言外の意味は，(28)と(33)とが合わさったものだろう。

以上，実例に則して具体的に見てくると，これらの用法に共通した「＋α」の内容を抽出することができる。それは，おおよそ，次のようなものだろう。

(35)ソノコトヲ，承知シテオイテクダサイ。

この抽象的な意味が，具体的な文脈の中で，相手を牽制して結果的にある行動を取るよう仕向けるために使われたり（＝(28)），参考意見として知らせておいて，相手の行動のなんらかの指針に供したり（＝(33)）という具体的な用法として具現するものと考える。

4．接続助詞の本来的用法との連続性

前の節で浮かび上がった「カラ」の終助詞的な用法の意味は，実は，終助詞的な用法に限って生じる特別なものではなく，接続助詞としての本来的な用法においても，注意深く調べると，共通した性質を観察することができる。

一般に接続助詞の「カラ」は「原因・理由」を表すとされ，この論文でも，この常識的な理解に立って終助詞的な用法の特徴を記述してきたが，常識的に考えるところの「原因・理由」という概念では説明しきれない用法もある。そして，そのような用法の中に，終助詞的な用法との共通性を見てとることができる。

たとえば，次のような用法である。

(36)そこにソースがありますから，自由に取ってください。

(37)ここに本がありますから，どうぞ読んでください。

(38)そこに字引がありますから，ちょっと持ってきてください。【4】

(36)～(38)のいずれにおいても，「カラ」節には，相手が期待される行動を起こすにあたり承知しておくべき情報を告知する機能がある。

Alfonsoによると，これらの「カラ」は，「『ゆるやかな』理由」(“mild reason”) を表わしている，という。たとえば，(34)について言えば，「聞き手のすぐそばにソースがある」という事実が，「遠慮なく自分で取ってもいいはずだ」ということの理由として提示されている，という。

この説明は，無理やり「原因・理由」の用法に結び付けようとした，いかにも苦しい説明で，そのままでは受け入れることができないが，接続助詞「カラ」に，「原因・理由」らしくない用法があるという事実を指摘した点を評価したい。

わたくしは，(36)～(38)のような「カラ」は，「背景を説明している」と考えるのが，より的確な説明の仕方だと思う。「背景」とは，主節で言われること（命令，依頼，勧誘など）をすんなりと行動に移すために相手が承知していなければならない（と話し手が考える），状況についての前提的な知識のことを言う。

その最も単純な例が，ものの存在についての知識である。たとえば，(36)のように言うのが自然な状況において，かわりに，

(36')ソースを自由に取ってください。

と発話したとしたら，相手は，まず，どのソースのことを言っているのかを確認することから始めなければならないだろう。(36')を相手にとって意味のある発話にするためには，まず，ソースの存在という，前提的な知識を相手に与えておかなければならない。また，同様に，(37)のように言うのは，相手が本の存在に気がついていないかもしれない（と話し手が思っている）からである。

もう少し複雑になると，あらかじめ決められている段取りについての知識も，これに含まれる。

(39)〔レストランでのワインの飲み方の説明〕

ホストにはワインを味見する役目があります。ソムリエがボトルを見せて，グラスに少しだけ注いでくれますから，口に含んでうなずけば，あらためてゲストを先に注いでくれます。

（冠婚葬祭，128）

(40)〔エアコンの取扱説明書で〕

保証書は，販売店で所定事項を記入してお渡しいたしますから，記載内容をご確認いただき，大切に保存してください。

（取扱説明書　日立ルームエアコン）

(39)，(40)で，「カラ」節は，あらかじめ決められている（しかし相手は知らない）段取りを説明している。この段取りは，このように仕組まれていることを知らされていなければ，まごついたり，不安になったりするような性質のものである。たとえば，(39)では，「味見するワインはどのようにして用意されるか」，(40)では，「保証書はどのようにして記入されるか」という知識は，それぞれ「ワインの味見」，「保証書の取扱い」に関して知っておく必要のある段取の知識で，かつ，相手にとっては不案内なものである。

さて，前置きがいささか長くなってしまったが，ここまで考えを進めてくると，一見，本来的な用法とは縁遠い「カラ」の終助詞的な用法は，実は，本来的な用法の変種に位置づけて説明がつくことが明らかだろう。すなわち，「背景の説明」の用法において主節の部分を言わずに済ましたものが終助詞的な用法というわけである。もとが同じ構文だから，共通の意味的な性質を備えていることは，自然なことだろう。

意味の違いは，主節が明示されているか否かによって生じる。主節が明示されている場合（すなわち，接続助詞の本来的な用法の場合），聞き手にどのような行動を期待した上での「背景の説明」なのかが自明だが，主節が明示されない場合（すなわち，終助詞的な用法の場合）は，それを聞き手自身が考えなければならない。別の言い方をすれば，主節が明示されないことによって生じる言外の意味は，次のようになる。

(41)コノコトヲ踏マエレバ，アナタガドノヨウナ行動ヲトッタラヨイノカ，ワカルハズダ。

これが，3節で導き出した言外の意味，すなわち，

(42)ソノコトヲ，承知シテオイテクダサイ。

と，実質的に同じ意味になることは，すぐわかるだろう。何のためにあることを「承知しておく」のかというと，とりもなおさず，「どのような行動をとったらよいのか」を判断する前提的な知識になるからである。

5．おわりに

「カラ」の本来的な用法と，終助詞的な用法との意味的なギャップを埋めることを目指して出発したこの研究だが，調べていく過程で，このギャップは，本来的な用法についての理解不足に起因する，見掛けだけのものだということがわかった。すなわち，本来的な用法の一つとして「背景の説明」という用法があり，「終助詞的」な用法は，この用法の変種と考えれば，

何も特別扱いする必要はなくなる。

そうすると，結局，一見異なった意味を表わすように見える二つの用法の連続性は，本来的な用法と終助詞的な用法との繋がりとしてではなく，本来的な用法どうしの繋がりとして捉え直されることになる。

「背景の説明」という用法と「原因・理由」という用法とは，同じく主節で言われることの説明という点で，連続性がある。すなわち，より一般的に言えば，

(43)〔 X 〕カラ〔 Y 〕。

という複文構造において，Xは，Yの説明になっていて，その説明の仕方には，①原因・理由を示して説明する場合と，②背景を示して説明する場合があると考えるわけである。

「原因・理由」を表わすとは言いがたい「カラ」の用法は，これ以外にもある。たとえば，次のような「カラ」の用法である。

(44)　貞九郎が大きな袋を抱えて入ってくる。
貞九郎「やあ」
君章「よお」
良介「お前，また何を買うて来たの？」
貞九郎，袋を開ける。
貞九郎「うちの近所の金物屋が，店じまいで大安売りをしてたから……マンションになるんだよ，その店」

(夏物語，202)

「カラ」の用法の全容を明らかにするためには，このような用法についても考えなければならないが，今回は，その余裕がない。また，稿を改めて論じることにしたい。

注

【1】白川（印刷中）。

【2】「会ったから」ではなく，「会ったんだから」というふうに「のだ」を付けると，おかしくなくなる。

【3】ついでながら，英語では，(26)のような場合に接続語句を使わず，二つの文を単純に並列して表現するのがふつうのようである（Alfonso(1980: 545)を参照のこと。）たとえば，次のように。

Aunt Junko: Here's your thermos, Scott.
I filled it with hot chocolate.
Scott: Oh, thanks, Mam.
（『英語会話』1990.2の本文より）

【4】Alfonso(1980)，p.545-546.

出典一覧

余裕＝ひかわきょうこ「女の子は余裕！」『月刊 La La』1990年4月号．白泉社．
ときめき＝ジェームズ三木『ときめき宣言』徳間書店．
めぞん⑦＝高橋留美子『めぞん一刻⑦』小学館．
夏物語＝鎌田敏夫『男女7人夏物語』立風書房．
ラブ②＝柴門ふみ『東京ラブストーリー　2』小学館．
ラブ①＝柴門ふみ『東京ラブストーリー　1』小学館．
めぞん②＝高橋留美子『めぞん一刻②』小学館．
十六歳＝藤長野火子「十六歳のマリンブルー」『シナリオ』1990年4月号．シナリオ作家協会．
冠婚葬祭＝吉沢久子『すぐに役立つ冠婚葬祭百科』成美堂出版．

参考文献

Alfonso, Anthony. 1980. *Japanese Language Patterns.* 上智大学．
国立国語研究所．1960.『話しことばの文型(1)—対話資料による研究—』秀英出版．
水谷信子．1985.『日英比較　話しことばの文法』くろしお出版．
白川博之．印刷中．「『テ形』による言いさしの文について」
『広島大学日本語教育学科紀要』創刊号．